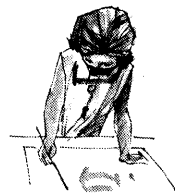


# 幼児の人物画について(一)

## 性別の表現



青 木 隆

子どもたちの描く人物画から多くの研究が生まれ、絵画による精神検査法もいろいろ開発されてきた。次にあげる二つはその代表的なものであろう。一つはグッドイナッフの人物画による知能検査であり、他はマッコーバーの人物画による性格診断法である。この両者はすでに桐原・大伴・扇田などの方々によって紹介され、一般的に使用されてもいるので、ここに改めてふれる必要もないと思う。マッコーバーの性格診断法は年少幼児より、むしろ学童以上に適用するのが有効であるように思われるが、グッドイナッフの人物画検査法は、逆に年齢が低い方により適切であるかのように見受ける。それゆえ幼児画の発達を研究する以上、この人物画法をさけて通ることができないだけの価値を十分にもっていると考えられる。私はここ二、三年

来、ハリスがグッドイナッフの技法に手を加えて改定した人物検査法を中心として、他にベンダー・ゲシュタルト・テストの児童用診断法の研究者として知られるコピッツが開発した人物画診断法なども参考にしながら、あれこれと幼児の人物画の周辺をうろついてきた。しかししよせんはらちもない堂々巡りのくりかえしであったのだが、幼児の人物画はまことに興味深い課題を次々私に提供し続けてくれた。

そこでここに幼児の人物画にまつわる問題のいくつかをとりあげてみることにした。

### 男性像と女性像

ハリスがグッドイナッフの人物画検査法を改めた点はいくつ

があるが、従来、男性像のみ描かせていたものを女性像・自画像を加えて合計三点の絵を描かせるように改めた。このように一度に描く作品の数を増し、課題に変化をもたせることによって、知的発達の実定の精度を高めただけでなく、他に多くの利点をもたらしした。特に種々の性格診断の技法を同時に併用できる点が考慮されているのみでなく、たとえば自画像と他の画像との比較によって自己概念の成立過程を知る手がかりを得るなど、今後の展開に多くの可能性を含むものとなった。

実際に幼児の描いた作品を三点ずつ並べて見ると興味をそえられる問題が感じられ、たった一枚の男性像が物語る内容よりはるかに深度のふかいより多様な情報がくりひろげられているように思われる。

ハリスの人物画法における指示には、man・woman・yourselfという言葉が使用されていたので、最初私は無難作に「男の人」「女の人」といって作画させていた。ところができ上がってくる作品の多くは、manではなくてboyであり、womanではなくgirlであった。「男の人」だけでは少年でも成人でもさしつかえないことになるが、子どもたちにとって描きやすい人間像は同年齢程度の画像であって、成人の画像を描くのはやや抵抗があるらしいことが分かってきた。特にことわらないかぎり、「男の人」とか「女の人」とかいうだけでは少年像を描き、少女像

を描いてしまうのかもしれない。また、元来成人と子どもとの画像は描きわけにくいもので、彼らはおとなを描いたつもりでも私の目にはすべて少年や少女の像に見えてしまうのかもしれない。

このような混乱をのぞくために、それ以降の調査からは「男のおとなの人」「女のおとなの人」というように改め、幼児に対しては「お父さん」「お母さん」という言葉を付け加えることに統一した。(幼児に対してパパ、ママという指示方法はハリスに従っている)

このように改め集めた幼児の作品から、まず最初に受けた印象は、年少幼児にはおとな・子どもの区別はおろか、男性・女性の区別すら示されていないことであった。つまり三枚の画像の間には、ほとんど差異が認められないものが多かった。それでも年長クラスではなんとか男女の差が描き分けられているかのように見受けられた。しかしおとなと子どもの相異が判別できるように描き分けられている作品はまことに少なかった。そのため男児にあつては男性像と自画像、女児の作品では女性像と自画像というように同性の画像の間に変化の見られないものが多かった。

(写真参照 写真は、左から男性像、女性像、自画像の順)  
そこで第一にとりあげる問題点は、幼児の人物画に見られる

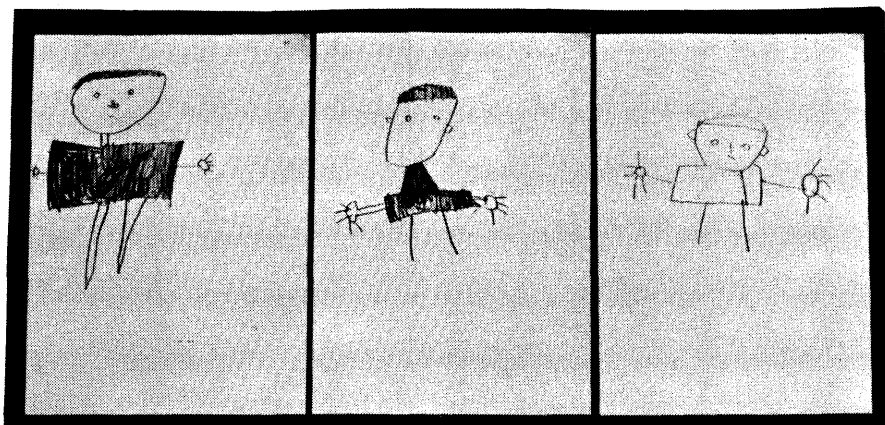


写真1 5歳10ヵ月男児 性別の表示は認められない

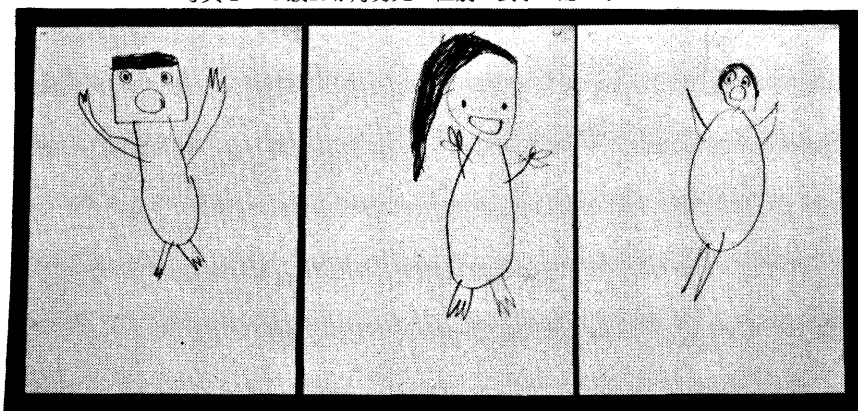


写真2 5歳10ヵ月男児 女性のみ毛髪を長く表わす



写真3 5歳男児 女性はワンピース、男性はメガネが描かれている



写真4 4歳5ヵ月女児 男性のみ毛髪表現法がちがう



写真5 5歳8ヵ月女児 頭部では区別されていないが、ズボンとスカートによってかきわけている。女性にはペンダント、男性にはネクタイ



写真6 5歳9ヵ月女児 性別の描写はかなり進んでいる。髪形やリボンによって年齢差もやや認められるが、はっきりしていない

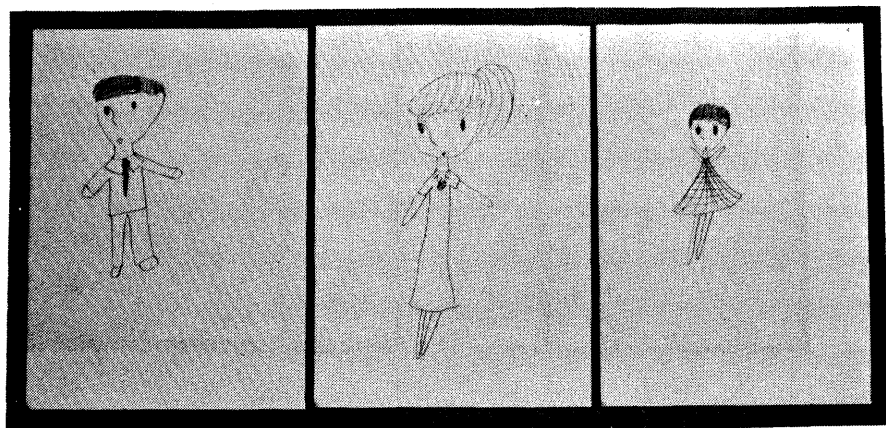


写真7 5歳11ヵ月女児 性別の表現が進んでいるばかりでなく、年齢差もかなり出ている

表1

年少 C.A.4 : 4 ~ 5 : 3  
年長 C.A.5 : 4 ~ 6 : 3

	年 少	年 長	T
男 児	57	57	114
女 児	43	46	89
T	100	103	203

### 調査とその結果と考察

性別の表現は、いつごろから現われ、どのようなものであるか、  
 までもし年齢差を表現するとしたら、どのようなかたちをとる  
 のか……この疑問に対して以下の調査を藤沢市の私立K幼稚園  
 で行なった。

標本は表1に示すとおりで、四歳四ヵ月から六歳三ヵ月までの  
 の二〇三名の対象児に  
 クラス単位の集団でハ  
 リスの人物画検査を実  
 施した。

作品は多くの場合、  
 性別などに関係なく人  
 体の示すポーズは三点  
 ともほぼ同一であった。  
 つまり十字架のように  
 両腕を水平にした人体  
 を描いている子の作品  
 は三点とも十字架型で  
 あり、バンザイ型の子  
 の作品はいずれも同じ

ポーズ……というような傾向が強かった。しかし同じ人体の構成であってもいくつかの異なった細部が認められ、こうした部分が男性・女性の表現とかわわっていることが多かった。一般に幼児がとりあげている性別の表示に關している部分を具体的にしるすと、第一がヘアスタイルであり、第二がスカートである。そして人体を構成する主要部分の構成パターンは変化することなく、髪形や衣服等のごく一部だけを加筆するか、さしかえるかして男女の別を表示するにすぎない。しかし年長グループのなかには、描画の最初の段階——一般に人物画は頭部や

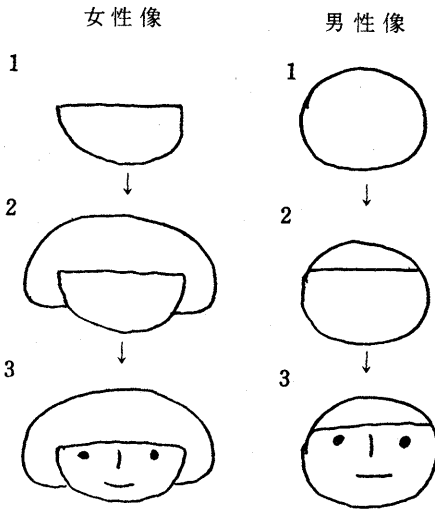


図 1

毛髪のアウトラインから描き始める——で、すでに男女の画像を描きわけている例もある。(図1参照) このような例は決して珍しいものではないが、これは男性なり女性なりの画像がもつ概念的な映像やその表現形式がすでに成立していると解釈してよいだろう。

表2は前記の標本において男女の区別が表示されている作品の数、年齢群別、男女別に示したものである。これによって年少グループから年長に向かって性別の表示が有意に増加していることがわかる。特に注目すべきは同年齢群では女兒が優位にある点である。(1%水準で有意) 年少女兒はこの年齢水準で半数以上が性別を描きわけていると見なすことができる( $\chi^2 R=1.665\%$ 水準)のに反し、男児は年長グループでさえ統計的には半数以上とはいえない。(C.R.=1.192) この原因が何に由来するかをただちに理解することはできない。しかしこの一つの事実のみに基づいて人間像の描写に關して女兒の発達に優先するかに考えてよいものなのだろうか。

ハリスの人物画検査法では標準化標本における女兒の各年齢群の得点の平均値は、それと対応する男児の年齢群の平均値より高くなっている。この傾向は男性像の平均得点の間にみられる差よりも女性像においていっそう顕著である。女兒の得点、男児のそれをうわまわる傾向は、四十数年前のグッドイナッフ

表2 性別の表現

N	年 少			年 長		
	男 57	女 43	P	男 57	女 46	P
性の区別がある	18	27	★★	34	43	★★★
女性像はスカート	9	19	★★	25	42	★★★
女性像の髪が長い	11	24	★★	26	40	★★★
その他					4	

★は5%水準   ★★1%水準   ★★★は0.1%水準で女兒が優位

の標準化の時には現われたし、単にアメリカだけでなく日本の標準化（桐原）のさいにも同様の結果が得られている。そしてまた私の予備調査の標本（五歳から十歳まで男児・女児各六十名）からも同様のことがうかがえた。このように女兒の平均得点が高く算出されてきた事實は、単に標準化のさいの標本に偶然のかたよりがあったためとは考えられない。このような平均得点の差が知能に基づくものでなく性差に基づくものであるならば、今回ハリスが改定したよう

に、女兒のための尺度と男児の尺度とは当然別に設定しなければならぬ。つまり従来のグッドインナップの男女共通の尺度によってMAに換算すると、男児は女兒より半年かそれ以上の知的発達におくれがあるともみなすこともできる。しかし人物画に性差が関与している以上このような断定はゆるされない。そればかりではなく人物画の発達を一次元的な直線上の前後関係として、単純にとらえようとすることが困難であるかのように思われてきた。以前私はかなりの点数の小学生の人物画を採点しながら、男児と女兒との作品の間には見た目のちがいはかりでなく、かなり内容的な相異が感じられた。女兒の作品は細部描写が緻密である。特にまつげ、ひとみのキャッチライトやくちびる、衣服のスタイルや文様、そして髪形など細部描写に関して女兒ははるかに意欲的である。これに反して男児の作品は人体のプロポーションがややととのっているかのように見受けられた。そして女兒の場合は一般に頭部を大きく描き表わしたり足が長すぎる傾向が強い。これらの諸点のいくつかは幼児の作品にすでに見られる傾向でもあった。このような採点時の経験をとおして、もしかすると男児と女兒の人物画は幼児のころから全く同一のコースをたどって発達してゆくのではないかもしれない……という疑問をもつようになった。

たしかに一般に使用されている児童用の多くの知能検査では、

性差は現れないとされている。これは知能検査を作成する段階で、階層差、地域差、性差などの文化的影響の現われやすい問題はとりのぞくことが一般的な前提となっているためであろう。それでも検査を構成する個々の問題によっては性差が見られるとの報告も多いようである。ハリスの人物面検査における採点項目は、いわゆる一般の知能検査における下位項目の概念とはやや異なったものではあるが、同様に採点項目の中の一つかには性差が現われるように思われた。ハリス自身その著書の中でこの問題にふれ、いくつかの項目では男女間の通過率に統計的な有意差が見られると述べている。そしてアメリカにおいて性差の現われた項目は、私の手もとにある標本においても類似傾向があるのではないかと予測するにいたった。

そこで男女それぞれの年齢群の各項目における通過率を算出し比較することにした。

## 第二の調査

さきに述べたように幼児が男性像と女性像を描きわけけるためには小道具が必要である。つまりスカート・ハイヒール・ハンドバッグ・ネクタイ・パイプ、そしてヘヤースタイルなどである。ハリスの人物画法の項目には衣服やアクセサリに関するものがかなり含まれている。男性像は73項目からなりたっているが、衣服に関する項目5、毛髪に関するもの4となっている。女性像にいたっては71項目中、衣服・アクセサリ・靴に関するもの17、毛髪に関するもの4となっており項目総数の $\frac{1}{3}$ 以上をしめている。もちろん幼児の人物面の発達段階では、その採点にあたって該当する項目数は五歳児でも全体の $\frac{1}{4}$ から $\frac{1}{3}$ 程度の作品がほとんどで、該当項目の個人差によるばらつきを考慮しても幼児の作品の採点に必要な項目数は全体の $\frac{1}{2}$ もあれば十分である。まして衣服などに関する項目の多くは採点基準が高く、幼児のほとんど全部の作品が該当することのない項目もかなり含まれている。それにもかかわらず二、三の衣服等に関する項目では通過率もかなりな数に及ぶものと思われたし、これらの衣服等に関する数項目に性差の現われる可能性が最も強いように感じられていた。

以上の経験的な観測に基づいて、性別の表現と衣服等の描写との関連性を次のように仮定してみた。……幼児の人物画の中で性別を描きわけているものは女兒に多い。そして性別の表現は主として衣服やそれに類するものによって表示される。……とするならばハリスの人物画法における衣服関係の項目でも女兒は優位を示すのではなからうか。もちろん衣服の存在そのものをストレートに表示しさえすればよいということと、性のちがいを衣服によって表示することとは、同じように衣服が描

かれていても内容が異なっている。このことは十分こころえて  
いるつもりであるが、一応今回は衣服関係の項目等の通過率を  
各年齢群の男女間で比較し、その内容を検討することとして次  
の作業を行った。

標本は表3に示すように川崎市内の公立の保育園十四からな  
る幼児五五三名である。これらの作品は各保育園の担任の保母  
さんによって検査を実施したもので、まず採点し男女それぞれ

%						
11	5 : 0 ~ 5 : 11			6 : 0 ~ 6 : 4		
	M 90	F 78		M 39	F 34	
★★★★	46	72	★★★★	72	79	—
★★★★	84	99	★★	89	98	—
—	46	61	★	64	79	—
★★★★	58	67	★★	74	94	★
	18	27	—	23	58	★★
	19	39	★★	48	64	—
	32	22	—	48	32	*
—	71	65	—	76	69	—
	13	2	*	15	6	—

の年齢群ごとの通過率を算出した。ここに示すものは男性像の  
場合のみであるが、性差の現われたものを選んで示した。

おおよそのところ項目5・18・19・55・56・63の6項目では  
女兒が優位であるといえるが、項目10・47・48では統計的に男  
児が優位とはいえなかったが、さきにあげた藤沢市の幼稚園の  
場合では、この三項目は年長組では有意差が見られた。（女兒  
の場合は幼稚園でも前記の6項目でほとんど同じ結果になって  
いる）これらの項目の採点基準について少し説明すると次のよ  
うなものである。

項目5 目の細部 まゆかまつげ、またはその両方が描いて  
あること

項目18 毛髪が表示されていること

項目19 毛髪はおおむね頭の上方にあって「なぐり描き」的  
なものより進歩したもの

項目55 衣服が描いてあること。胸にボタンがならんでいた  
り帽子だけでもよい

項目56 すくなくとも衣服が二種以上。たとえば、帽子とズ  
ボン、ボタンとポケットなど

項目63 運動感覚の協応、描線がよくコントロールされてい  
ること、描線の正確さ

以上の六項目は女兒の優位が認められたものである。

表3-A 性差の現れた項目(保育園)

C. A.		3:0~3:11			4:0~4:	
項 目		M 55	F 45		M 91	F 106
5 まゆ、まつげ		7	15		12	35
18 毛髪があれば良い		18	31	★★	51	73
19 毛髪が18より進んだもの		2	9		13	23
55 衣服が示されていること		1	7		13	33
56 衣服が2種以上		0	0		1	5
63 描紋の正確さ		0	0		1	8
10 鼻 two dimensions		8	0		8	6
47 胴の巾(胴の長さ)		12	12		48	40
48 1/2胴(頭) 1/10胴		2	0		7	2

表3-B 性差の現れた項目(幼稚園)(%)

項 目	年 少			年 長			
	M 57	F 41		M 56	F 46		
10	19	17	—	48	19	**	表中の数はすべて%を表す ★ 5%水準 ★★ 1%水準 ★★★ 0.1%水準で女兒が優位 * 5%水準 ** 1%水準 *** 0.1%水準で男児が優位 以上は出現頻数のカイ次乗検定によるもの
47	68	50	—	89	70	**	
48	30	2	***	33	6	*	

項目10 鼻がtwo dimensionsに描かれていること、つまり点や短かい棒のような形ではなく、し字形でもU字形でも面積のあるものなら認める。但し鼻の低部の幅が鼻すじより短くなければならない。

項目47 胴のプロポーション、胴の長さが胴の幅より大きいこと

項目48 頭のプロポーション 頭的面積が胴の面積の $\frac{1}{2}$ 以下で $\frac{1}{3}$ 以上であること。

以上の三項目は男児が優位にあると思われるものである。

一般論として子ども人物画の発達過程は二つの方向を同時に進行させていると見なすことができる。一つは細部描写への過程であり、他は全体像的統合への過程である。つまり分析的と総合的との二つの方向である。例をあげて説明すると、分析的とは黒くぬりつぶした小さな円で目を表示する段階から、ひとみやまつげを描くようになったり、棒のような脚(Legs)のみであったものが足(Toes)を描き、やがてくつとなり、くつのかかとやひもを描写するようになる。このように部分の描写がより細分化してゆく発達を意味する。これに反して総合的とは、初め円形の顔であったものが縦長の楕円となり、正方形に近い胴が長方形となり、指や腕、脚の長さが太さより大きくなるというように、部分自体の縦横の比がほぼ正しく描写でき

るようになり、次に頭と胴・胴と腕・腕・脚、あるいは腕と脚などのように部分相互の位置関係や量・長さの比が一層正確さを増してくる。そして全体像的なまとまりが成立するようになる。このようにより高次の部分に下位の部分が従属し全体像と部分との有機的関係へと発展してゆくことを意味する。

以上のような仮説にしたがって幼児の人物画の発達過程を考えるならば、男児も女児もともにここにあげた二つの側面を同時に進行させていることに相異はない。しかしながら表3に示した結果から推論すると、女児は細部描写への分化を指向する傾向が強く、男児は全体像的統合への指向が強いかにように見受けられる。しかし今回の簡単な調査だけで軽々しく断定出来る性質のものではないので、今後の課題として項目分析や要因分析を加え研究を続けなければならない。

ただここで附記しておきたい点が二、三ある。先年私が本誌に報告したように、視点の統一や遠近の描写のように、部分を全体の中に統合し、位置づけてゆく構成は男児に優先性が見られたことである。「子どもたちが手をつないで大きな輪を作っている」絵と、「テーブルを囲んで子どもたちがおやつを食べている」絵を描かせたところ、女児には立画面と平画面の混用が全般的に見られたが、男児には画面すべての映像を立画面的に統一しているものが見られ、視点の統一に関しての優位性が

認められた。また他の機会に「赤ずきんちゃん」は森の中でお花をつんでいます。おかみか木のかげからこれをのぞいています。遠くの方におばあさんの家が見えます」という指示に従って作画させたところ、赤ずきん・おかみ・遠くの家——小さく表わす——を視点を統一させながらなんらかのかたちで遠近（透視図法的とはいえないが）の説明的描写を行なっているのは男児が優位であった。

このような傾向は他にも類似した報告が見られる。ミヤラレは「読み方・書き方・描き方の実験心理学」の中でルロワ他による児童画における遠近法の発達の研究を紹介し、遠近の描写が知的発達と深い関係にあることを述べているが、掲載された図によって男児が優位であることを示している。

描画の問題とは焦点が異なるが、図形模写や図型認知に関する研究は多い。これらは描画の研究をはるかにうわまわっていると思われるほどである。そして文化差や性差にふれているものも見られる。

知能検査に現われる性差については一般にサーストンの因子分析にいうところの空間因子において男児が、言語に関する諸因子において女児が優先とされている。ペンダーは視覚運動ゲシュタルトの成熟過程そのものには文化差はなく、初めて鉛筆を持ったアフリカの未開の子どもたちもニューヨークの子ども

たちも図形模写における一連の成熟段階は同一であると考えているし、コピッツはペンダー・ゲシュタルト・テストによる発達検査の作成にあたって性差を認めていない。（彼女が作成した人物画法の発達尺度では性差を認めている）

また、日本保育学会が編集した「日本の幼児の精神発達」の中に見られる図形模写に関する項目（円・正方形・三角形・菱形の模写）では性差は現われていないといえる。しかしながら田中敏隆は「図形認知の発達心理学」の中で——特に性差についての章をもうけている訳ではないが——結言の部分でわずかではあるが性差にふれ、男児の優位を述べている。また「図形概念に関する発達——発達段階と性差の検討——」では、二つの標準図形と五つの比較図形からなる九組の問題を課し、同一範疇に属する図形を選ばせる検査を行ない、図形概念の発達に關しては五歳から十四歳まで一貫して男児が優位にあるとしている。

この他にもいくつかの報告が見られるが、文化的影響を受けやすいものほど性差が現われやすい傾向にあるように思われる。これは幼児期における性差は主として文化的影響によって生じるという考えとも一致する。描画の領域、特に人物画とか遠近法は文化的歴史的背景によって成り立っているので、人物画を対象としながら、文化的要因を全くとりのぞいた検査法や実験

法を考へることは不可能に近い。幼児の臨床場面における行動観察に基づいて項目を設定していった津守真・磯部景子による「乳幼児精神発達診断法」では、構成あそび・絵画・製作の領域でかなりの性差が見られる。

### 要約と考察

幼児がどのように性別を描きわけているかを調査したところ、女兒は幼稚園の年少グループですでに半数以上が、なんらかのかたちで男女の画像を区別して表示していたのに反し、男児は年長グループでさえ、統計的に性別を描きわけているものが多いいとはいえなかった。性別を描きわける手段として幼児一般に見られる傾向は髪形や衣服によっている。そこでハリスの人物画法における男性像の採点項目の通過率によって比較したところ、女兒は衣服、毛髪に関する項目で優先していることが認められた。これは予測されたことであつたが、他の保育園の標本でもほぼ同様の結果が得られた。

しかし、ここで新たに別の問題が現われた。一つは女兒が描線の正確さを意味する項目ですぐれている点と、男児が人体のプロポーションの把握にまさっている点である。

以上のように幼児の人物画における性差に基づく相異点を例記してみると、幼児画の発達が指向している方向が多様であり、

幼児期を成り立たせている要因が多いと考えざるを得ない。ここでは便宜的に分析的方向と統合的方向画を想定し、前者は女兒に、後者は男児においてより強い傾向を示すのではないかと考えてみた。この問題は今後因子分析などによっていつそうほり上げてゆく予定である。そして抽出された因子と性差を関連させて検討してみたいと思う。もしこのようにして描画における性差の様相がいつそう分析的に明確になるならば、グッドイナッフがかつて指適したように性向尺度 (masculinity-femininity scale) のような診断技法も可能かもしれない。それ以上に精神薄弱児や情緒障害児の発達のゆがみの診断に役立つかもしれない。私の夢は野放図もなく広がってゆくが、現実には未採点の標本にとりかこまれ、何から手をつけてよいのか困惑している状態である。

先日、日本社会事業大学附属の「のびる学園」を訪れた。この学園は自閉症のみを対象に、石井哲夫教授を中心として治療教育を行なっている。そこで見せられたある女兒の描いた人物画は変わっていた。それは一つの人体に男性の性器と女性的な乳房とが同時に表わされていた。同学園の先生のお話ではこの女兒は特に注意しないかぎり、いつも両性を同時化してしまうとのことであつた。あたかもギリシャ末期の彫刻に見られるヘルマ・アフロディーテ (男性神ヘルメス・女性神アフロディー

テとを一体化したもの)のごときものである。年少幼児の描く人物画に性別は示されていないが、この自閉症児の描くヘルマ・アフロディーテの画像には性の表示がありながら性別が成立していない。この事例は多くの示唆に富んでいると思われる。自閉症児には同一視や性的同一化あるいは性役割の習得が全く欠けているのではなからうか。対人関係の障害がこのような作品となったと見なしてよいのではなからうか……。この一例のみからあまり多くを推量することはつしまなければならぬが、障害の側から人物画の性別の表現などをとらえて社会性の成熟と関連させてみることもまた必要であろう。

#### 参考文献

- ベンダー・L 高橋省己訳 児童精神医学の技術 1971 関書院  
 Harrio, D. B., Children's Drawings as Measures of Intellectual Maturity; 1963, Brace & World.  
 ハリス・D・B・津守真 児童発達教育学 1970 光生館  
 岩脇三郎 知能検査入門 1971 日本文化科学社  
 Kellogg, R., Analyzing Children's Art; 1970, National Press Book., (和訳 深田尚彦訳 児童画の発達過程)  
 桐原葆見 精神測定 三省堂  
 Koppitz, E. M., The Gestalt Test for Young Children 1967

#### Grune & Stratton

Psychological Evaluation of Children's Human

Figure Drawing. 1968 Grune & Stratton.

ミヤラレ 読み方・書き方・描き方の実験心理学 現代心理学

VIII・言語とコミュニケーション 1971 白水社

日本保育学会 日本の幼児の精神発達 保育学講座 9 1970

フレーベル館

津守真 磯部景子 乳幼児精神発達診断法 1965 大日本図書

田中敏隆 図形認知の発達心理学 1966 講談社

図形概念の発達——発達段階と性差の検討——心理学研究 1970 40, P. 314~322

渡辺秀敏 知的機能における男女差 性差心理学 1970 朝倉書店